

PB-110

腹腔鏡手術での直介看護師の意識変化 ーアニマル・ラボ参加経験からー

京都第二赤十字病院 手術室

○古味 佳子、大浦 ゆかり、浅田 直美、石黒 裕美子、
藤森 紀久子、萩原 愛、仲村 美輝、岩澤 史子、
朝倉 早月、福田 紗矢香

A病院手術室では、腹腔鏡手術が増加してきており、腹腔鏡手術の器械の取り扱いや手技について手順に基づき器械出しを行っていた。しかし、医師から直接介助者の知識や技術に差がありチームとしての一体感が少ないという指摘があった。腹腔鏡手術は開腹手術よりも視野が狭く、手技も複雑であることからより高度な技術や知識、チームとしての連携が必要である。今回、アニマル・ラボに参加することで看護師も器械出しだけではなく実際に鉗子操作の体験ができ、腹腔鏡手術の難しさや介助の必要性を理解し、意識変化が見られたので報告する。対象：手術室看護師11名期間：2012年4月～2014年3月研修内容：豚を用いての腹腔鏡手術体験調査方法：研修後アンケートアンケートでは「満足度」「役立っているか」という質問に対し「満足している」「役立っている」と全員が答えた。看護師が胆嚢摘出術を執刀したことで、腹腔鏡手術手技の難しさを体感し、器械出しの重要性を再認識できたと考える。また、実際に自分が鉗子や吻合器を使用したことで普段得られない手術の細かな部分まで理解することができた。これらの体験から「術中画面を見ながら次に必要な器械が予測できるようになった」「チームで手術するという意識が高まった」と手術を看護師も主体的に取り組もうという意識変化がみられた。今回の結果より、器械の動きを事前にチェックする、医師がモニター画面から視線を外さないようにポートまで誘導しながら器械出しをする、そして後輩に指導するようになった。現在、医師と協力し腹腔鏡下幽門側胃切除術の改善に取り組む手順を新しくマニュアル化し、これらをチームで共有している。

PB-112

個別性を重視した教育指導案の作成を目指して

さいたま赤十字病院 手術室

○檀上 宏美

【はじめに】手術室看護師の看護業務を遂行するにあたり、患者に安全な看護を提供する事が難しいと判断されたA氏に対し標準的な教育以外に個別性を重視した教育を行う必要性を感じ検討した。【方法】1 情報収集＝ 個人面接。振り返りノート指導内容ノート。2 指導メンバー選出＝ 係長、係長補佐(8人)による教育・指導。3 教育案作成会議＝ 指導案用紙を2種類作成。a実態の把握用紙(技術段階、業務態度、得意、不得意、必要としている援助) b目標設定用紙(目標設定、具体的な指導法記入) A氏への指導方法、目標設定。指導内容の統一。情報の共有。4 担当手術の見直し＝指導メンバーへアンケート実施。

【倫理的配慮】研究の主旨、集計、発表に関して個人名は特定されないこと個人に不利益がないことを説明し、承諾を得られたことを確認した。

【結果・考察】A氏の振り返りの内容が技術的なものが多いのに対し、指導者はコミュニケーション不足を指摘するものが多くあった。A氏と教育側の視点の違いから、一方的な教育を行っていた事が分かった。(特別支援教育)資料を参考にし、a、b、指導案用紙を作成した。a、bの用紙を用いて、指導メンバーにてA氏への教育案作成会議を行った。A氏と指導側のズレを無くす為、作成した指導案はA氏に提示し、両者で目標の設定、確認を行い、月毎に振り返る事とした。また、固定されたメンバーでの手術配置は、お互いのストレスとなっていた。A氏の状況を理解していないスタッフの中には、指導者側に不信感や疑問を抱く者もいた。そのため、指導メンバーをラダー2以上に拡大し、A氏の状況を共有する事で個別性を重視した教育に繋がると考えた。(特別支援教育の資料を参考にした)指導案用紙は、自らの指導を客観的に捉える事や、指導を受ける側を理解する為に有効であった。

PB-111

医師事務作業補助者対象の文献検索指導

伊勢赤十字病院 研修センター¹⁾、診療支援課²⁾

○小林 美香子¹⁾、大辻 純²⁾

【目的】当院では平成20年度より3年間、医師事務作業補助者(以下、メディカルアシスタント=MA)の院内研修プログラムを運用し、その中に文献検索の時間を4時間設けていた。しかし、これ以後の採用者については院外研修を利用し、併せて院内研修として「文献検索」を行う方法に変更したので報告する。

【研修の概要】1. 開催日時：平成25年11月13日(水)15:30～17:00、2. 場所：図書室および研修室、3. 参加者：平成25年4月以降に採用した派遣職員MA6名。4. 研修目的：MAとしての役割を果たすために必要な医療知識を得る方法を知る機会とする。5. 内容：1) 図書室オリエンテーション、2) 演習1：調べる内容を見つけるために「今、仕事を進める上で困っていること」「今、調べたいと思っていること」「知っている薬の名前」をワークシートへ記入。3) 演習2：Webを利用した文献検索。キーワード抽出後、メディカルオンラインを利用した文献検索、医薬品医療機器情報提供HPから薬剤添付文書情報を入手。4) 振り返り。

【結果および考察】派遣職員MAは医療経験のない者が多く、仕事を通じて医療用語を覚え、疾患の理解に努めている様子であった。研修終了時の振り返りでは、文献検索の演習を体験したことで、自己学習そして仕事への意欲が感じられる発言が多くあった。医師事務作業補助者としての業務を遂行するための知識の習得については、自己研鑽に委ねるところが多いが、配属科に必要な知識を効率的に収集できるよう支援する必要がある。

【今後の課題】医療経験のない派遣MAが、当院のMAとしての業務が遂行できるよう、スキルアップのための研修会を企画する必要がある。

PB-113

ご意見箱から学ぶ病院サービスの改善点

前橋赤十字病院 事務部 企画情報管理課

○森村 真奈美

【はじめに】当院では病院サービス向上を目的として院内15か所にご意見箱を設置し、総務課職員が投函されたご意見を毎週回収し職員へ周知している。ご意見内容を分析・検証し、今後の課題が明らかになったので報告する。

【方法】平成24年度及び平成25年度に回収された428件のご意見について、各年度で「ご指摘」、「要望」、「お褒め・感謝」で件数を集計。更に各項目で、多数寄せられた内容を分析した。

【結果】平成24年度については「ご指摘」が80件、「要望」が60件、「お褒め・感謝」が53件、平成25年度については、「ご指摘」が141件、「要望」が38件、「お褒め・感謝」が56件だった。「ご指摘」や「要望」としては、外来の待ち時間や施設のハード面のご意見、職員の接遇についてのご意見が多く挙げられており、今後改善の必要がある。「お褒め・感謝」では、医療スタッフへの感謝の言葉が多く見られた。特に、入院患者へ提供する食事についてのご意見も多数寄せられており、ご意見に対し栄養課で改善策を検討したことで、平成24年度では「ご指摘」が多かったものの、平成25年度では「お褒め・感謝」のご意見が増え、年度で変化が見られた。

【考察】外来の待ち時間に対しては時間短縮のための検査の受診方法変更、施設のハード面に対しては建物の老朽化による新病院建設の計画等、各部署で改善策を検討している。職員の接遇については、何気ない一言が投書の原因であることも多い。接遇研修等に定期的に参加し、各自対応を振り返ることも必要である。ご意見箱には直接は伝えにくい患者の真意が詰まっている。またそれは氷山の一角であり、その裏には数多くの患者の想いが隠れている。良質な病院サービスの提供のためには、ご意見を真摯に受け止め、検討することが重要であると考えている。

一般演題
(ポスター)
10月16日(木)